

# 「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」地域活性化・まちづくりへの応援

メッセージ

# 会報

NO. 24

2015.2.20発行

編集責任：河地 清

[Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp](mailto:Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp)

## 第24回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

### テーマ『小野道風春日井誕生説の検証』

2月1日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において第24回「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『小野道風春日井誕生説の検証』で開催しました。

講演は「ふるさと春日井学研究」フォーラム副会長 塚田忠雄氏でした。同氏は、地域での「小野道風研究」の第一人者で、長年に渡って生誕伝説のある地元でしか判らない歴史的地理的感覚、地元でしか理解できない歴史の閃き、そして何よりも道風に関わる資料を全国各地を足で確かめ片っ端から丹念な聞き取りによって歴史学上不明な点の多い人間「小野道風」の真実に迫る研究活動を長年してこられています。

当FORUMでは今日まで、『「書のまち春日井」と小野道風』（2013.3.3）、『小野道風出生の真実』（2013.10.13）を発表されてきましたが、今回のテーマ『小野道風春日井誕生説の検証』は、「もし、道風が春日井で誕生していたとしたならば、10歳前後で英才教育をどこで受け、なぜ宮廷から白羽の矢が立ったのか・・・」等々を中心に今までの研究成果を熱く語られました。興味深い内容に、市民30名が熱心に聴き入り、参加者からの質疑応答も多数ありました。



－発表要旨－

「小野道風春日井誕生地説の検証」に取り組んでいる発表者塚田忠雄の講演はこれで3回であるが、春日井市文化財友の会での発表を含めると4回目になる。「検証1」は2013年3月3日の第1回ふるさと春日井学フォーラムであった。山本信吉氏が吉川弘文館の人物叢書『小野道風』を出版(2013.3.1)した直後で、この本の中で、山本信吉氏は「父の葛絃は地方官を歴任(㊦878年には加賀介に任じられた)し、前述したように寛平8年(896)には越前守に在任中であったから、その任地もしくは前任地での生まれということも考えられる」と書いている。また、父葛絃は「将来を嘱望されたエリート官僚だった」とも書いている。はじめて道風春日井誕生地説を否定しなかった人だ。残念ながら昨年2月27日に亡くなられた。ところが、春名好重氏は春日井市道風記念館編集発行『書聖小野道風』(1991年)の「小野道風の人と書」執筆され、その中で「道風の伝記にはわからないことが多い」とし、「伝説は事実とは無関係ではない。伝説には事実の反映がみとめられる」と言いながら、「道風の伝記には伝説の部分が多い。伝説を無視することはできないが、伝説をそのまま事実と認めることはできない。それ故、伝説は参考にして、道風の伝記を書くこととする」と書いている。道風の父葛絃は「善良にして有能な官吏であった」(「天下循良之吏」と藤原保則伝にあると紹介。備中掾(保則が守の時)や備前介(871年)などの中級官僚として有能だということらしい)と、書も詩も特段有能とはいえず、中級官僚だ、まして「大宰大式にはなっていない」(「扶桑略記」や「公卿補任」にあるが)と断定した。また「延喜8年(908)に越前守であった」と紹介している。春日井誕生地説については、「道風の父葛絃も、道風も、尾張国は関係がない」(P76)と言い切っている。「尾張国で生まれたという伝説はどうして生じたのかということとはわからない」とダメを押す。山本信吉氏(1931-2014.2.27)も春名好重氏(1910.4.5-2004.6.27)も道風記念館顧問であった。歴史の真実は意外なところから明らかになる。ここ数年、地方での発掘と古文書発見、地域に眠っていた資料の解読が進んだ結果、多くの俗説が真正のものと認知され、新説が認知されてきた。

今回の道風春日井誕生地説にからむ発表は、道風の幼少期に才能を伸ばす学びの場はこの地にあったのかという追究である。10歳前後に高度な教養や技能、役人としての資質を伸長する教育・養成機関として尾張学校院や大学寮が想定され、その可能性を検討するものであった。

1969年から1990年にかけての勝川遺跡の発掘調査で、9世紀後半～10世紀の様子も明らかになった。春日井市教委と県埋蔵文化財センターなどによる発掘の報告書はすべての調査を終えての報告書ではなかったが、「勝川廃寺範囲確認調査既報」(1~4次1981.3~1984.3に刊)の形で公表されている。奈良時代から平安時代にかけての古代寺院で、8世紀頃には造営され9世紀後半頃まで存続したとされた。小野道風誕生が894年で、9世紀末である。場所は勝川町5丁目の上屋敷地区である。当然それに並んで郡衙があったと推定される。発掘調査にあたった県埋蔵文化財センターの樋上昇氏は2002年に、これまで

の公表されていなかった収蔵品の再整理と再検討をされ、その中で郡の役所が近くにあったに違いないと推定されている。(「研究紀要第4号」)上条や松河戸から近い場所に地方豪族の役人が統治をする役所があったことになる。地方豪族の子弟は役人養成所である尾張学校院(現稲沢市、名鉄国府宮駅すぐの場所)で勉強したはずだ。

地方豪族で郡司となった者の子は聡明であれば**13歳から16歳**で「国学」を学ぶ施設である学校院で学んだ。尾張国では**学生(がくしょう)定員40名**、ほかに**医生(いしょう)8名**の定員であった。欠員があれば庶民の子弟の入学も許された。教育課程は大学(大学寮)とほぼ同じであった。卒業者は試験結果によっては官人に登用され、また**大学寮**に入る資格も得た。学校院の教員は**国博士(くにのはかせ、地元から採用)1名**、**国医師(くにのいし)1名**で、ほかに**史生(ししょう)**が各3名置かれていた。この制度は10世紀末でほぼ消滅したという。道風の幼少期には尾張学校院の施設があった。(大江匡衡(まさひら、952-1012)が再興と伝わるが再興したのかどうかは不明、大江家は藤原氏と並ぶ学問の家柄、菅原道真の死後は大江家が隆盛、妻は歌人の赤染衛門、大江匡衡は992年、997年、1002年に尾張国司着任、1009年は復任したが不向)道風は里人の女に産ませた子と伝わるが、地方豪族の娘の子だと推定される。

問題は学校院の入学資格が13歳から16歳という点だ。この点について、ちょうど大学寮改革の時期で、入学年齢が17歳から10歳に引き下げられたことに着目した。京の大学寮は806年の「勅」による「学令」で**10歳以上**の諸王と**五位以上の官人の子孫**に引き下げられた時期であった。この改革は上流貴族の反発をかい、大学寮側からの反発もあり、812年に撤回されたが、824年に復活している。反発の理由は入学年齢の17歳への引き下げと就学期間9年を実質4年間に短縮したことであった。4年間の後は中退を認めたことで、4年間でよくなったということである。当時、任官に卒業が必須でなかったため、和気・藤原・橘・王氏など有力貴族では大学別曹(弘文院・勸学院・学館院・奨学院などの私学)を設けていた。大学は9世紀から10世紀初頭が全盛期で、遣唐使停止(事実上の廃止)による中国文化への関心低下が背景にあった。そのほかに、律令制の弛緩と藤原氏の摂関政治の確立などで、大学の地位が薄れていったこともあった。914年(道風の20歳のころ)に大学寮は荒廃していたと書く者もいた。荒廃の内容はわからないが、学生数はかなり減っていたという。大学制度の改革に伴い、学校院での国学の制度も変わったはずだ。入学年齢も引き下げられたと思われる。

道風はこの変革期に生まれた。尾張学校院や大学寮に入学できた可能性が拓けた。もしそうなら幸運な人である。教育課程で漢詩や儒学への負担の軽減は書への尽力の機会も開けたことになる。和様への独自の道を拓くこともこの環境変化に負うところが大きいのではないか。

山本信吉氏が道風は10歳で京に上ったことは十分考えられると述べたのは、他にもそういう事例があるからと述べられたが、それだけではなく、新しい制度での大学寮に入学するためではなかったかと思える。京都の大学寮址は二条城の南西角(中京区西ノ京美福門通

と押小路通の交差する南西角)に石碑(「此附近大學寮址」と刻む)がある。そこで学ぶ道風の噂が伝わり 12 歳で醍醐天皇の拝謁につながったのではないかと思いが広がる。もちろん後ろ盾の祖父篁や父葛絃の孫や子として注目もされたであろう。講演資料では、祖父と父、叔父らと有名氏の紀氏、藤原氏、大江氏、菅原氏との関係・縁故も幸いでいたのではと指摘している。以上、新しい視点で小野道風春日井誕生地説の検証を試みた。「新説」である。大学寮制度の改革の中身と結びつけた展開は新鮮ではなかったかと思う。さらに、菅原道真が道筋をつけた 9 世紀末から 10 世紀初頭にかけての改革が大化の改新以来の巨大な政治改革だったとする平田耿二(こうじ)氏の著『消された政治家』(2000 年刊、文春新書)を紹介し、道真の改革が目指した新しい体制が

律令国家と区別して「**王朝国家**」を構想した、中世への転換をお膳立てするものであったことを紹介し、時代の転換点であった 10 世紀の平安時代の時代背景にも目を配るべきだとした。漢詩にすぐれ、儒家として傑出する中国流の文人政治の時代が終わろうとしていた文化大革命の時代でもあった(国学院大教授神田龍身氏)。

このほかに、松河戸の観音寺に保管する道風画像の軸を 1 月半ばに写真に撮り、スライドで保存の現状を紹介した。保存状態はよくない。行政の助力が必要だと訴えた。

(記録：塚田 忠雄)

## OPINION

### 「小野道風」研究の経緯と今後

「小野道風」研究は、平成 25 年 3 月山本信吉「小野道風」(吉川弘文館)が人物叢書として出版されたことにより、大きく一步前進したと言えます。従来までは、文化的側面から見た道風の書の分析や書道史の中における位置づけに研究の視点はあったように思います。

人間「道風」の研究・検証については、確たる実証的資料の乏しさと相まって、あくまでも伝承、伝説の域を出ないとの学問的研究環境が、歴史学としては生産的成果の望めない項目として多くの研究者は取り組もうとはしてこなかったと言えます。そうした中で、地道に地域の歴史として先祖代々この「伝説・伝承」を保存し、保護されてこられた「松河戸誌研究会」の「記憶」と「伝承」の活動は、地域の「誇り」と「Identity」を生み出して来たと言う点で、歴史学という学問に、一つの問題を提起しているものとして私たちは注目しています。つまり、894 年に生誕した小野道風について、1200 有余年の時間軸を乗り越えて、「記憶」と「伝承」という歴史資産、文化資産として歴史的要件 (fact) として継承されてきました。「松河戸誌研究会」は、先祖代々地域に伝えられてきた「記憶」と「伝承」を地道に真摯に引き継がれ資料の蒐集、遺跡の保存、を先祖代々引き継いでいる研究会であります。今日の、道風記念館、遺跡保存会の存在の基礎は「松河戸誌研究会」に負うところが大きいと言っても過言ではありません。「松河戸誌研究会」で蓄積されてきた社会的記憶、伝承(口承伝統、文書、イメージ、史跡保存、文化的行事等々)の記録の中

から、道風に関する個別の歴史研究や書道文化活動の成果は生まれ、今日あると言うことができます。歴史研究は、地域の人々にしか感じ得ない発想や閃を第一義に考えて行くことが重要であると考えます。その意味から、地域の人達の「記憶」「伝承」の記録の営みは、小野道風研究にとって最も重視されなければならないことであると考えます。



歴史を語るということは、過去から伝えられてきた「記憶」「伝承」をその時々々の社会情勢、価値観、歴史意識、文化受容度等々によって記録され、叙述されて未来へ伝えられてゆくという行為のことです。(歴史科学協議会編集『歴史評論』(校倉書房 2004年3月号「歴史のなかの伝統」において問題提起された)

「記憶」「伝承」を歴史研究の方法論として歴史叙述を読み解いて行く作業が始まっている今日、「松戸誌研究会」の地域に果たしている役割と学問的役割は大きいと言えます。秦鼎が撰文して建てた「小埜朝臣遺跡碑」には、「抑其の母屋は此にあり之を遺したるか府志の記載によれば必ず由緒あればなりもし之を詳らかにする者あれば請うそれ告示せられよ千百歳の後と雖も可なり」と刻まれており、道風がこの地に生きた証を後世の人々に明らかにしてくれることを請うた歴史的な碑文

です。この「碑」こそ今日の「道風研究」の原点とも言うべきものとなっています。安藤直太朗は、秦の問いかけに本格的な道風研究として『小野道風』(昭和 39 年 第一法規出版)を上梓し今日の「道風研究」の嚆矢となったといえます。同じ年に現在の道風記念館入り口近くに安藤直太朗撰、藤田司馬之書、文部大臣愛知揆一題額「小野道風公生誕地之碑」(横巾八十五cm高さ2メートル)が建てられました。安藤の道風研究が優れているのは、地域の地理、風土、歴史を熟知した郷土史家と国文学者としての視点から時代風景が視える叙述になっている点に大いに説得力をもつ研究となっていることです。この碑にはその自信の程が表現されたものとして、藤田東谷の書と調和して碑群の中でも一際光彩を放っています。(拓本・川口一彦氏提供) ※安藤直太朗 明治 36 年春日井市に生まれる。国文学者。愛知第一師範学校卒業。春日井市教育長、椋山女学園短期大学教授、春日井市文化財保護委員など勤める。 ※藤田司馬之(東谷) 明治 42 年春日井市に生まれる。佐分移山に書を学ぶ。県立高校教諭歴任。小野道風遺跡顕彰に力を尽くす。小野道風公奉賛全国書道展の企画運営委員代表となる。中部書道界の第一人者。昭和 54 年愛知県から文化功労者表彰を受ける。今日までの道風研究でまとまったものは、春名好重・久曾神昇・中田勇次郎『書聖小野道風』(平成3年11月道風記念館発行)と、前掲著作を含めたものが主要なものとなっています。塚田忠雄氏の人間「小野道風」研究は、何よりも地域の風土、自然、歴史に根付いた歴史的閃きとそれに基づく整合性の高い想像力で、

従来の文献を精査して、道風と言う人物を時代の中で生き生きと描き出そうとする手法です。恩師安藤直太朗の遺志を引き継いで、地元の感覚でしか理解でき得ない、新しい「小野道風」研究がまとめられることを期待したいと思います。(文責：河地 清)

## 次回 FORUM のお知らせ

### 第 26 回テーマ『書のまち春日井と空海—景教碑を中心に—』

発表者：川口 一彦 氏（愛知福音キリスト教会 牧師・書家）

日 時：平成 27 年 4 月 5 日（日）13:30～15:30

場 所：市民活動支援センター・

ささえ愛センター 2 階第 1 集会室

フォーラム内容：「景教碑」とは、キリスト教の教え聖書の内容が解説された碑のことです。

日本に二つしかない（京都大学、高野山）石碑の次に春日井の川口氏が主宰される愛知福音キリスト教会の前に建碑されました。何故でしょうか？そして、三筆の一人空海とどのように関係しているのでしょうか？・・・続きは FORUM で

※資料代 500 円（非会員のみ徴収）

### 第 27 回テーマ『歴史・文化を生かしたまちづくり』

#### ①『歴史・文化を生かしたまちづくり』

発表者：河地 清 氏（「ふるさと春日井学」研究フォーラム 会長）

フォーラム内容：「まちづくり」の応援メッセージを発信しはじめてから 2 年経過いたしました。経過報告を兼ねて「まちづくり」とは？を考えてみたいと思いました。

#### ②『玉野地域の今昔』

発表者：近藤 雅英 氏（春日井市古文書研究会 会長）

フォーラム内容：玉野地区の郷倉に未整理のまま保存されていた古文書を解読し地域の歴史を発掘しました。ふるさとの歴史に新たなページが加わりました。・・・  
続きは FORUM で

日 時：平成 27 年 5 月 3 日（日）13:30～15:30

場 所：市民活動支援センター・

ささえ愛センター2階第1集会室

※資料代500円（非会員のみ徴収）

〈事務局〉「ふるさと春日井学」研究フォーラム 会長 河地 清

TEL/FAX 0568-82-5973 メール：kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学 検索 